

---

# サチ子と銀行強盗

土壙 友

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サチ子と銀行強盗

### 【Zコード】

Z8957V

### 【作者名】

土壇 友

### 【あらすじ】

サチ子は銀行強盗の一人（武田）にカージャックされる。やつと武田から逃れたと思ったら、見張り役ではないかと警察に追及される。

ベラン刑事の坂田に事情を説明しやつと解放される。武田の仲間、洋子が現れ一緒に強奪された現金を追う。

## サチ子と銀行強盗

### 一、カージャック

土曜日の午後、K子を誘つて図書館へ行つた。

調べものをしたり、余つた時間は読書をしたりして、自由に過ごした。帰りには駅の近くの喫茶店で、お茶を飲んで世間話。そう……いつもと変わらない週末。

午後七時ごろK子と別れ、スーパーで買い物をして愛車に乗る。しばらく走ると赤信号に当たつた。ひと気はないが仕方なく止まる。と、黒い影が動いた。次の瞬間、突然助手席のドアが開き、若い男が乗り込んできた。

驚いた私は悲鳴を上げた。男は私の口をふさぎ「騒いだら殺す」と脅した。片方の手にはナイフを持っている。

私は動搖し、からだじゅうが震えた。

男は面倒臭そうに

「信号が変わったぞ、出せ」と言つた。

「どこへ行くの？」

「どこへ行こうとしていたのだ？」

「アパートへ帰ろうとしていたの」

「なら、アパートへ帰れ。おとなしくしていれば危害を加えない」  
あー、私ってなんてバカなんだ。駅へ行くとか言って、どこかで降りてもらえばよかつた。このままじや付いてきてしまつラジオからニュースが流れている。

「きょう午後一時ごろ発生した銀行襲撃事件は七時間以上たつた今も、こう着状態が続いています……」

隣町で発生した強盗事件、銀行強盗は逃げ遅れて機動隊に包囲さ

れているようだ。

最初に駆けつけた警察官は撃たれて路上に横たわったまま、まだ救出できないらしい。

男はラジオを消した。

何の打つ手もなく、私の車はアパートの駐車場に入った。

男は降りると命令し「騒いだら殺す」と、又言った。

もう少し気の利いたセリフはないの、騒いだら殺すと一人で騒いでいる。まったく

私はだいぶ冷静になってきた。

きっと管理人のおじさんが助けてくれる。

地下の駐車場からセキュリティカードを挿入して一階の玄関フロアーに出る。

エレベータの前に立つ。

管理人さんからこの位置が見えるはずだ。

おじさん、助けて

管理人さんは新聞を読んでいて顔を上げない。

早く、早く顔を上げて

エレベータが開く。

男は下半身を私のお尻に突き当てる、私たちはエレベータに乗り込む。

アーッ、最悪。役に立たないおじさんだ

「何階だ?」

「エ、……三階」

「ボタンを押せ」

モー、いちいち命令しないでよ。泣きたいわ、全く

部屋のドアが開くと、男は乱暴に私の背中を押して一緒に入ってきた。

男は居間のソファーに腰を下ろし、黒い大きなバッグを大事そうに床に置いた。テレビをつけてニュースを見ている。しばらくして部屋中をきょろきょろと見回し始めた。

私は台所にある冷蔵庫の隅に身を隠すようにして、壁にへばり付いていた。

男は部屋中うわうわしていたが、そのうちに台所に入ってきた冷蔵庫を開いた。中を確かめている。怯えていた私を見ると「うまそうだな」と言つた。

私は恐怖で声が出ない、男から顔をそむけた。

男は私を見つめたまま冷蔵庫に手を入れ、中にあつたケーキを取り出した。

「誰かの誕生日祝いか?」

「エ、えへ、わたしのよ」

意外な展開に、男の顔色が変わつた。

「誰か来るのか?」

男は早口で尋ねた。

「いいえ、独りでお祝いするつもりだったの」

「そうか、誕生日おめでとう」

男は安心したように、口元を醜くゆがめて笑つた。そして、ワンホールのデコレーションケーキにかぶりつくと、あつという間に食べ尽くしてしまつた。

「迷惑をかける、これは口止め料だ」

男はバッグの中から札束を驚掴みにして、テーブルに並べた。

「エ? こんなにたくさん? 私困ります」

マックタ、そーゆう問題じゃないだろ? なんと言えばいい? 私はうろたえてしまつた。

「なーに、こんなのはブルジョアのカスだ。気にする? ではない」「あなた、銀行強盗の仲間なの?」

「……」

男は冷茶ドリンクを飲み干すと、テレビに皿をやつた。

「頼みがある、このバッグを預かってくれ」

「困ります、私には無理です」

私は必死になつて断つた。男はとても怖い顔をして、呻くような

低い声を出した。

「逆らうこととはできない。取りに来たとわ、無かつたら殺す」  
「アーチ、またなの、私は何回殺されるのかしら  
私は黙つて冷蔵庫の陰にしゃがんだ。なるべく男を興奮させない  
ようにするためだ。

男はそのうちに大きないびきをかいて眠ってしまった。「ガオー」と、大声を出すかと思うと、呼吸が止まる。

こいつ、無呼吸症候群かしら。奥さんまつゆをくじ、睡眠不足になつてしまつわね

でも、脱出するにはチャンスかもしれない。台所から居間を抜け玄関から逃げる。

気付いて追いかけたら「ひつよ」、エレベータでは捕まつてしまつかも知れない。

非常階段を降りるか?

怖いけどやつてみよう

私はそつと立ち上がった。

すると、いびきが止まつた。

「逃げたら殺す」

男が低い声を出す。

私は縮み上がつた、起きていたのか。いや、寝言かも知れない。でも、確かめることなどできない。

早く夜が明けてくれ、と祈る。

窓から見える空が、やつと白々としてきた。

男は意外と目覚めがよかつた。洗面所で顔を洗うと、大きなオナラをしてから台所に入つてきた。

「よかつたら車を借りたい」

「えー、私通勤に必要なの。」「まあねわ」

男はもう不快な色を顔に出した。

あー、またやつちやつた。この男は出ていくと言つてゐる。車なんて何よ、お安い御用でしょ

「あ、まつて。いいわ、私、車使わないの。だつて今日は日曜日だし、通勤もいつもは電車よ。気にしないで使って」  
気分、壊しちゃったかしら？」

男は何もしゃべらずにテレビを見ている。

テレビでは昨日の事件の速報を流している。

きょう未明、強盗犯は投降し、人質は無事解放された。事件は一件落着したようである。

「鍵は？」

突然男が喋った。

「エ、エ、エ……何々？」

「車のカギだ、どこにある？」

「あー、あそこ。玄関よ、玄関の靴箱の上に置いてあるわ」

男はバッグから札束を一握り取り出すと、ポケットにねじ込んだ。

「いいが、よく聞け。間違えるとお前は確実に死ぬ」

「ハイ。はい、はい。わかつています、大丈夫です」

「いいか、俺は出ていくが午前中は部屋から出るな。わかつたか？」

「ハイ、わかつた。わかりました」

「それから、このことは誰にもしゃべるな。わかつたか？」

「ハイ、もちろん。誰にもしゃべりません、全部忘れます」

男は「聞き分けのいい娘だ」と言つて出て行つた。

私は腰が抜けたようにその場にしゃがみ込んでしまつた。

「アー、アー。助かつた

## 二、任意同行

解放されて疲れがどつと出た。昼過ぎまで寝ていて、午後一時ごろようやく動き出した。

お腹がすいたので近所のコンビニへ買い物に行こうと、部屋を出た。

ようやくあの男の影を感じなくなつてホッとした。

玄関のロビーまで降りていくと、人相の悪い二人連れの男に呼び

止められた。

「サチ子さんですね、確か三一郎室の」

若い男が話しかけてきた。

昨日のこともあり、私はひどく怯えた。

年輩の男がにこにこと愛想よく近づいてきて

「失礼しました。私は坂田と申します。いやね、大したことではないんですがね、S署の者なんですよ。いやいや、ほんとにご心配なく、何でも無いことなんですよ。こいつは相棒の柴田と申します。本当に無粋なやつでして、さぞ驚きになりましたでしょう。申し訳ありません」

と、懇懃に頭を下げる警察手帳を見せた。

私は少し安心して「ええ、そうですけれども。何かご用でしそうか？」と尋ねた。

柴田という若い刑事が、一枚の写真を見せて「この男、知っていますね」と言つた。

あの男だ

私は気を失いそうに驚いた、見る見るつかに血の気が引いていくのがわかつた。

「これこれ、そんな尋ね方はないだろ？ いやね、大したことではないんですけどね、防犯カメラにこの男が映つていましてね。ご存じないかな、と思いましてね」

「バツチリですよ。サチ子さんと一緒にエレベータに乗るところが映つていたんです。知らないっていうのなら、犯人藏匿の可能性も出てきますよ」

なによ、まったく失礼な刑事さん。知らないとは言つていらないわ  
「え、昨日のことはよく覚えていませんが……」

「それなら、署で思い出してもらおうか」

「それって何よ。逮捕令状でも持つているの？」

「いやいや、これこれ。若い者ですので口の詫き方も知らず大変失礼しました。そういう事ではなくて、少し足労願えないかな、

と思つて、はいー

結局S署に出頭させられた。

取り調べは坂田というベテラン刑事が当たつた。

「昨日の銀行強盗は知っていますでしょう?」

「ええ、逮捕されたそうですね」

「銀行に人質を取つて立て籠もつた三人は逮捕しました。

最初に駆けつけて撃たれた警官ですがね、殉職しました。

あと少しで定年退官でした。あとすこし……でね」

坂田さんはこぶしを握りしめていた。

「あんな奴らは……。法律つてのはねえ、時として邪魔なこともありますよ」

坂田さんはタバコをふかしてしばらく沈黙していた。

「ところで、写真の男ですが武田といいます。銀行強盗の一昧ですが、運び役だつたみたいですね。もう一人、女の見張り役がいてね、こっちはまだ面が割れていません」

チンピラですよ、と言つてまたしばらく沈黙した。

「武田つて男はねー、サラリーマンでしたが、リストラされてね、犯行当時は無職だつたみたいですね。学生時代は運動家だつたみたいですよ、『資本主義打倒』とか訳の分かんないこと、叫んでいてね」

柴田刑事がじれつたそうに割り込んできた。

「何か預かりませんでしたか? 武田から」

「さー、よく覚えていないのです」

「奴は高飛びしましたよ、バツチリです。空港のカメラに映つていました」

坂田さんがタバコをもみ消して、言った。

「国際線は捜査員が張り込んでいます、海外逃亡は無理でしょ。九州方面だそうですよ、いやなに、じきに捕まるでしょう」

柴田刑事が机をトントン叩いた。

「奴が乗っていた車ですがね、所有者はサチ子さんです。どういうことですか？ これは、場合によつては犯人隠避の可能性も出でますよ。あんた、見張り役と違いますか？」

ヒュー、私つて疑われているの？ 何でえ

「サチ子さんの部屋ですが、家宅捜索に入っています」

ヒュー、黒い鞄、テーブルの上だし。

口止め料いや違う、あいつが勝手に置いて行つた現金の束もそのま

まよ。これじゃ完全に共犯者じゃない

「こいつは<sup>デカ</sup>刑事の感ですが、何か出てきそうな気がします。楽しみですな」

「これこれ、口を慎みなさい。録音されていますよ。といひでサチ子さん、あなたにとつて状況がとても不利であることはご理解いただけると思います。私はあなたを信じます。どうか正直に話してくれませんか、坂田大善、一生のお願いです」

### 三、逮捕

三泊してやつと警察から解放された。

この数日間は一体全体なんだつたのだらつ、疲れた体を引きずつてアパートに帰つてきた。

ドアを開けると、電話が鳴つてゐる。急いで受話器を取る。

「洋子と申します、武田のことでお伺いしたいのですが……」

約束の時間にチャイムが鳴つた。

玄関ホールに出迎えてみると、細身の美人が立つてゐる。

「私は武田の代理人です。預けた物をいただきに來ました」

「あー、お返ししたいのですが、生憎と警察に押収されてしまつて」

「冷蔵庫は見ましたか？」

「立ち会わなかつたからわかりませんが、警察の事ですから……。それに冷蔵庫の中は食品しかありません」

「お願いですから、ソーテージを検めてください」

「え、ソーセージ？」

私は半信半疑でソーセージを取り出した。

よく見ると小さな傷があり、ほじつてみると中からカギが出てきた。

「マーほんと。鍵が出てきたわ、何の鍵かしら」

「駅のコインロッカーの鍵です。

一人で行くのは心細いので、一緒に行つてもらえませんか？」

私は好奇心から快諾し、洋子さんと駅まで連れ立つて出かけた。ロッカーの中には小封筒が入つており、鍵とメモがあつた。

メモには、何やら十二桁の数字が書いてある。

「また鍵ね、それにこのメモ？ なにかしら、ほんとに不思議ね」

「信用金庫の貸金庫ですよ」

「えー、それでは盗んだお金を貸金庫に隠してあるの？」

「そうよ、安全でしょ、場所は浜松よ。わあ、行きましょう」

「あきれた」

私たちは新幹線に飛び乗つた。座席に座ると洋子さんは暇に任せて話しかけた。

「武田さんは戦士なの、戦つているのよ」

「エ、銀行強盗じゃないの？」

「ブルジョアジーと戦つているのよ」

「まー、評価は人によって分かれるでしょうけど……」

「日本の借金が九百兆円あるって知つてる？」

「エー、マー、常識的範囲ですけど」

「日本は、このままでは破産してしまつ。そうなつたら六十六年前の八月十五日に経験した時と同じような惨めな結果になるの」

「それなら、どうするの？」

「歳出削減して、財政赤字を減らさなければ」

「でも、景気を良くして……。利益が出たら税金で返すのではないの？」

「そこが資本家のすることじやね。そう言って国からお金を出せせて

甘い汁を吸つてゐるの。だから、赤字が増えても減らないのよ

「でも、経済学者だつて意見は分かれるでしょ、うへ？」

「ギリシャ、イタリア、スペイン……。答えは出でてゐるの」

「経済は難しくてわからないわ」

「違う、『舌を出す』という事を言つてゐるの。経済は関係ないわ」

私は洋子さんの迫力に押されっぱなし。

「どう考えたつて勝つ見込みなんか無い戦争をなぜ始めたと思つへ？」

「えー、わかんない」

「軍部と財閥が結託して、自分たちの利益をむさぼりうとしたから。國民は何も言わなかつた。声を出せなかつたのよ、戦争反対つて」

「そうなの？」

「その結果國民が責任を取つた、いのちと引き換えにね。國は焼け野原、まさに破産してしまつたの。同じことだと思わない？」

「えー、そうね。それなら原発も同じね、電気がないなら工場を海外に移転するなんて。資本家は國民を脅してゐるもんね」

「そーよ、その通りよ。サチ子さんも仲間よ、同志だわ」

「へへ、そんなに喜ぶなんて。わたし、いここと言つたかな？」

私は少し得意になつたが、脳みそはすぐに混乱した。

「でも、どうしてそれが銀行強盗と結びつくの？」

「ばらまくの。奪つたお金と『歳出削減・財政再建』のビラをセツ

トにして、東京スカイツリーから日本中にばらまくのよ」

「へ、何か……がつかり。もう少しカツコいこかな、と思つた。割と地味ね」

田を輝かしてゐた洋子は私の反応に興ざめしたようだつた。テンションの下がつた声で言つた。

「見解の相違ね。夢がないつて、いやね」

「じめん、じめん。そんなつもつじやなかつた。もうじき浜松ね、よかつた」

浜松駅からタクシーで三十分。

田舎の地方都市だと辺りは既に田園地帯が広がる。

目指す信用金庫に着いた。私たちは手続きを取るために受付で係りの行員を探した。

ふとキャッシュコーナーを覗くと若い男がいた。あれ……柴田刑事。

「柴田君。何しているの、こんなところで」

柴田刑事はまずい顔をして横を向いたが、それを機に四、五人の男が私たちを取り囲んだ。

先頭にいた坂田刑事がドスの利いた声で言った。

「洋子だな。逃げられないぞ、覚悟しろ。逮捕する」

洋子さんは青ざめた顔を私に向けて、ちいさく「革命万歳」といつた。

坂田刑事も盆休み返上で活躍している。

貸金庫の中には、大量のビルがアツた。武田はまだ捕まつていないし、強奪された多額の現金もまだ発見されていない。きょうは終戦記念日である。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8957v/>

サチ子と銀行強盗

2011年8月17日21時15分発行